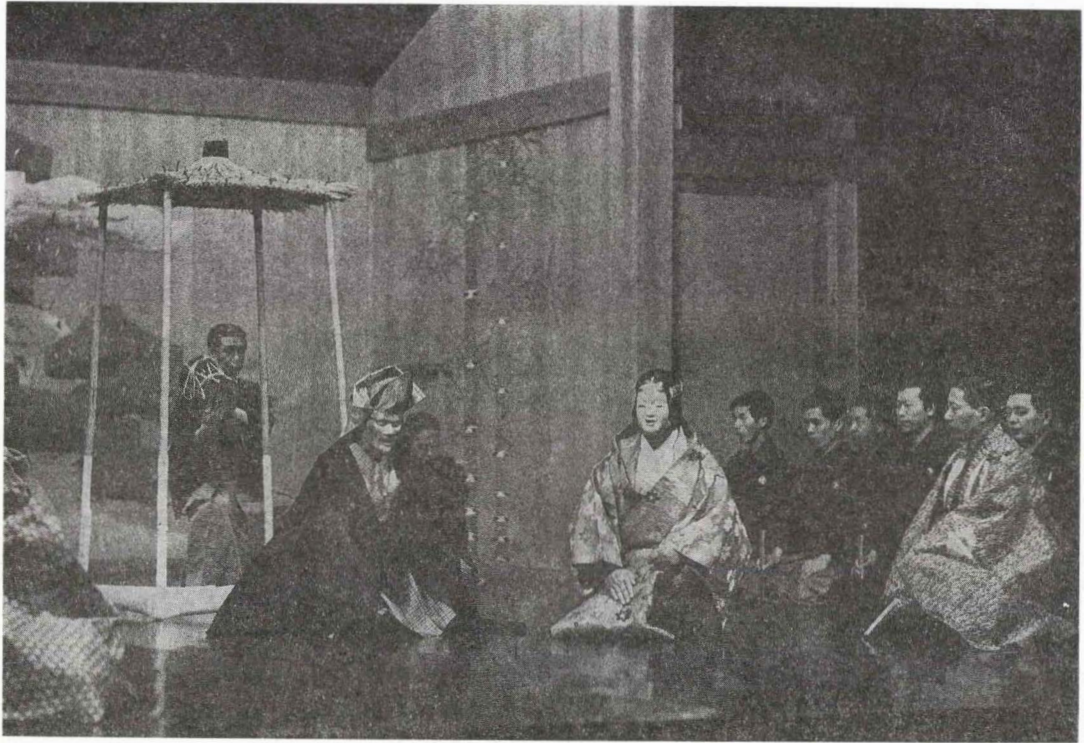


京大広報

No. 399

京都大学広報委員会



本学能楽鑑賞会で演じられる能「景清」の一場面 一関連記事本文1003ページ

目次

<栄誉>

- 数理解析研究所 森 重文教授が
文化功労者に選ばれる……………1002
- 服部正明名誉教授, 岡田節人名誉教授,
吉田善一名誉教授, 木材研究所長
樋口隆昌教授が紫綬褒章を受賞……………1002
- 東南アジア研究センター所長 矢野 暢教授が
スウェーデン王立科学アカデミー会員に選ば
れる……………1002

- 学術講演会の開催……………1003
- 能楽鑑賞会の開催……………1003
- 日誌……………1003

<随想>

- 蘇った構想・エイズ研究センター
名誉教授 日沼 頼夫……………1004

〈栄誉〉

数理解析研究所 森 重文 教授が
文化功労者に選ばれる

数理解析研究所 森 重文教授は、平成2年度文化功労者に選ばれ、11月5日、国立教育会館で顕彰式が行われた。

同教授は、本年6月に日本学士院賞を受賞し、また、本年8月にはフィールズ賞を受賞している。さらに、今般、文化功労者として顕彰されたことは誠に喜ばしい。同教授の今後の研究の発展を期待したい。

なお、同教授の略歴、業績等については、日本学士院賞受賞を報じた記事（『京大広報』No.391, 1990. 5. 15）及びフィールズ賞受賞を報じた記事（『京大広報』No.395, 1990. 10. 1）を参照されたい。（数理解析研究所）

服部正明名誉教授、岡田節人名誉教授、
吉田善一名誉教授、木材研究所長 樋口
隆昌教授が紫綬褒章を受賞

服部 正明 名誉教授（元文学部教授 インド哲学）、岡田 節人 名誉教授（元理学部教授 発生生物学）、吉田 善一名誉教授（元工学部教授 合成化学）及び 木材研究所長 樋口 隆昌 教授（木材生化学）に、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、平成2年11月3日紫綬褒章が授与された。

東南アジア研究センター所長 矢野 暢
教授がスウェーデン王立科学アカデミー
会員に選ばれる

本年1月24日、スウェーデン王立科学アカデミーは、矢野暢東南アジア研究センター教授を同アカデミー会員に選出し、3月22日、ストックホルムの同アカデミーにて同教授出席のもとで会員就任認証式が行われた。以下に同教授の略歴、業績等を紹介する。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介する。

矢野 暢教授は、昭和11年4月17日、熊本県に生まれた。昭和34年3月、京都大学法学部を卒業後、大学院法学研究科に進み、政治学を専攻、大阪外国語大学タイ語科専任講師、広島大学政経学部助教授を経て、昭和47年5月本学東南アジア研究センター助教授、同53年4月同センター教授となり、政治環境部門を担当して今日にいたっている。平成2年4月からは、同センター所長をつとめている。昭和62年11月には、タイ国三等白象勲章を受勲している。

同教授は、大学院法学研究科進学と同時に東南アジア地域研究を志し、タイ語、ビルマ語等を習得し、一次史料を駆使してまとめた『タイ・ビルマ現代政治史研究』によって、昭和45年7月、京都大学法学博士号を授与されている。さらに、昭和39年5月から昭和41年3月にかけての約2年間に、タイ国南部のイスラーム村落ドーンキレクにて単身定着調査を行い、その後も東南アジア各地でフィールド調査を重ねた。わが国の東南アジア研究のパイオニア的存在であり、また、政治学に「政治生態学」という新しい分野を開拓し、日本の社会科学に大きな影響を与えるにいたった。

同教授の手法は、政治現象を生態環境に規定される相対的なものとしてとらえるところに特徴があり、政治の画一的な認識を求めがちな政治学、ひいては社会科学一般の手法に画期的な視点を導入することになった。多元的發展論による東南アジアの政治構造についての独創的な見解はもとより、この地域の伝統国家の論理を描く「小型家産制国家」の理論などは、世界的な業績として評価されている。

『冷戦と東南アジア』ほかの業績に展開されている同教授の編み出した学際的な手法は、単に東南アジア地域だけではなく、地域研究一般の方法論にも計り知れない影響を与え得るものであり、それによってアジア世界のみならず、発展途上地域全般への深い理解と洞察も可能になり、社会科学の分野では独自の境地を拓いているものといえよう。

このたび、以上のような輝かしい学問業績により日本人社会学者として初めてスウェーデン王立科学アカデミー会員に選出されたことは、誠に喜ばしいことである。（東南アジア研究センター）

学術講演会の開催

平成2年度秋季学術講演会を下記のとおり開催します。本学教職員・学生の来聴を歓迎します。
記

日時 平成2年12月5日(水)午後3時 会場 法経第二教室
講師 早石 修(本学名誉教授)
演題 眠りと目覚めを司る物質 —プロスタグランジン D₂ と E₂—

講師略歴

1942年大阪帝国大学医学部卒業。大阪大学助手、1952年米国ワシントン大学医学部助教授、1954年米国国立健康研究所毒物学部長を経て、1958年京都大学医学部教授に就任。1979年～1981年同学部長。1983年退官。1983年～1989年大阪医科大学学長。現在、大阪バイオサイエンス研究所所長。医学博士。日本学士院会員、米国国立科学アカデミー外国人会員、ミシガン大学名誉博士など。

同氏は、生化学の歴史上画期的な「酸素添加酵素」を発見され、続く多くの研究により「生体における酸素の活性化及び活性酸素」の概念を打ちだし、国際的に大きな貢献を成し遂げられる一方、スレオニンデアミナーゼの研究を通じてアロステリック作用の概念の確立に寄与された。さらにプロスタグランジン代謝の研究を進展させ、PGD₂の中樞神経に対する役割を解明し、神経化学に新しい領域を拓かれた。

同氏の以上の成果は国内外の学会において高く評価され、朝日文化賞、日本学士院賞、ニューヨーク科学アカデミー生化学賞など数々の賞を受賞され、また、1972年には酸素添加酵素の発見と研究により文化勲章を受章されている。

能楽鑑賞会の開催

平成2年度能楽鑑賞会を下記のとおり開催します。本学教職員・学生の来場を歓迎します。
記

日時 平成2年12月7日(金)午後6時30分開演
会場 京都観世会館 京都市左京区岡崎円勝寺町44(東山仁王門を東へ約300メートル)
演目 能 「景清」 片山九郎右衛門 植田隆之亮 片山清司
狂言 「縄綱」 茂山千之丞 茂山あきら 他

入場無料

(学生部)

日誌 (1990年10月1日～10月31日)

10月1日	学位授与式	Heldrich 副学長来学、総長及び関係教官と懇談
〃	京都大学春秋講義 月曜講義 第1日(以後の日程は、8日、15日、22日、11月5日)	10月13日 名誉教授懇談会
3日	京都大学春秋講義 水曜講義 第1日(以後の日程は、17日、24日、31日、11月7日)	15日 平成2年度日本語・日本文化研修留学生開講式
〃	同和問題委員会	16日～18日
〃	放射性同位元素等管理委員会	平成2年度京都大学中堅職員研修(第4回)、平成2年度京都大学中堅職員実務研修(施設系)(第3回)
〃	平成2年度京都大学監督者(係長級)研修(第4回)	17日 国際交流委員会
5日	環境保全委員会	〃 国際交流会館委員会
〃	スウェーデン王国 王立工科大学 Janne Carlsson 学長夫妻来学、総長及び関係教官と懇談	20日 京都大学市民講座「ことば」第1日(以後の日程は、27日、11月3日)
8日	コスタリカ共和国 Oscar Sanchez 前大統領夫妻来学、総長と懇談	22日 アメリカ合衆国 Stanford 大学 James Gibbons 工学部長ほか2名来学、総長と懇談
9日	評議会	23日 評議会
11日	ドイツ連邦共和国 Heidelberg 大学 Volker Sellin 学長夫妻来学、総長及び関係教官と懇談	〃 平成2年度京都大学語学研修(英語・初級コース)第1日(平成3年2月22日まで毎週火・金曜日)
〃	アメリカ合衆国 Brown 大学 Maurice Glicksman 前副学長来学、総長及び関係教官と懇談	29日 カナダ Toronto 大学 James Keffer 副学長ほか2名来学、総長及び関係教官と懇談
12日	ドイツ連邦共和国 München 大学 Andreas	〃 ブラジル連邦共和国 Brasilia 大学 Antonio Ibañez Ruiz 学長ほか2名来学、総長と懇談

〈随想〉

蘇った構想・エイズ研究センター

名誉教授 日 沼 頼 夫

以下は、私が京大停年退官の約1年前に立案したエイズ研究センターの構想である。

名称(仮称): 国際ウイルス医学研究センター (International Research Center for Medical Virology)

目的: エイズとその関連疾患の予防・治療・診断に関する基礎的及び応用研究の国際的研究機関

期限: 10年

建設と設備必要額: 30億円

設立時期: 国策として緊急に1988年

設立の趣旨:

- 1, エイズは人類がはじめて遭遇した新しいレトロウイルスによる大流行性(パンデミック)の疾患であり、人種、国家を問わず全世界に拡大し、対数的増加を続けている。1991年にはエイズウイルス感染者が1億人に達するだろうとWHOが予告している。人類の存亡に関わる可能性もでてきた。人類の一員である日本人もこの危機を避けることは不可能であり、現在の医学はエイズの予防・治療に無策に等しい。
- 2, 人類がエイズを克服するためには研究を推進し、その成果によって予防・治療の道を創出する以外にない。
- 3, 日本における人間のレトロウイルスに関する研究は、成人T細胞白血病(ATL)を通じて世界で突出した成果をあげてきた。今こそ日本の研究の実力を、このもうひとつのレトロウイルスによるエイズに投入すべきである。人類全体のために日本人が貢献できる大きなチャンス。
- 4, このセンターは積極的に外国の研究者、特に若い研究者を正規のスタッフ及び客員として受入れ、国際的研究交流を推進する。また国外(例えばアフリカ)へ積極的に出張し現地で研究、特に応用研究を推進する。



5, 我が国のエイズ研究もすでに開始され、注目すべき成果をあげつつある。現在でも決して米国、フランスのエイズ研究先進国に遅れていない。

研究プロジェクト:

- 1, エイズウイルス
ウイルス遺伝子の構造と機能, ウイルス特異蛋白の抗原性, ウイルスの変異, ウイルスの病原性, ウイルスの伝播様式
- 2, エイズ免疫
免疫不全の本態, 細胞のウイルスレセプターの構造と機能, エイズ細胞性免疫の動態
- 3, エイズの予防・治療・診断
感染予防ワクチン, 発症予防ワクチン, 抗ウイルス及び免疫治療法の開発
- 4, 動物実験
エイズウイルス感染及び発症のモデル開発, ワクチン及び治療薬の実験

研究者人数: 約50人

建物の規模: 4,200㎡(詳細省略)

建設に必要な費用: 計2,159,240,000円(内訳
施設及び営繕費1,230,140,000円, 設備費
929,100,000円 詳細省略)

この構想の実現のため、時の文部大臣(塩川正十郎氏)に会い、総理大臣(中曽根康弘氏)にも声をかけたし、もちろん厚生省関係の実力者や代議士(中山太郎氏)にも運動した。先にも後にもこのように“政治的”に動いたことはない。

しかし、この構想自体は実現しなかった。

ところが、翌年、京大ウイルス研究所に教授2のエイズ研究施設、熊本大学医学部にエイズ関連講座1が実現した。その上に、厚生省関係として、国立予防衛生研究所にエイズ研究施設、国立医療センターにエイズ情報施設が実現されるに至った。もちろんこれらは、私の構想とは独立になされた概算要求である。

私の構想は、これで蘇った、と思っている。

海のものとも山のものともつかないその構想に積極的に協力された人々、特に(株)東燃の中原伸之社長及び京大ウイルス研究所の難波雄二郎助教授を忘れることができない。おくればせながらここに記して謝意を表する。(ひぬまよりお 元ウイルス研究所長 昭和63年退官 専門はウイルス学)